

近世怪異小説における「ろくろ首」の登場

——『曾呂利物語』と『諸国百物語』の比較を通して——

三浦 達尋

一、本稿の目的

ろくろ首は、寛永八年（一六三一）刊行の『新刊多識編』において林羅山が「飛頭蜜」に「ロクロクビ」と和訓を付けているのが、文献上に現れる最初と云える^{〔1〕}。この『多識編』は明の李時珍の『本草綱目』（一五七八年完成、一五九六年刊行）などを参考に、それらに登場する事物に和訓や和文による解説を加えた書物であり、草稿本は慶長十七年（一六一二）、古活字版は寛永七年（一六三〇）に完成した。そして翌年に『新刊多識編』として刊行されたのだった。広く流通したのは『新刊多識編』の方であるが、「飛頭蜜」の項目は古活字版から掲載されていた。出典のひとつである『本草綱目』に「飛頭蜜」の項目があり、林羅山はこれら飛頭伝承について記述された漢籍を参考にしたと考えられる。

「ロクロクビ」という名称の由来についてはっきりしたことはわかっていないが、貞享三年（一六八六）刊の山岡元隣元恕親子による仮名草子『古今百物語評判』巻之五の第二「絶岸和尚肥後にて轆轤首見給ひし事」では、元の陶九成の『輟耕録』から陳孚という人物の南蛮紀行における詩「頭飛如轆轤鼻吸似瓠□（篇に商、旁に瓦の漢字一字）」を引用して、この詩句が「轆轤首」という名称の由来であると説明している（『古今百物語評判』ではこの詩句が『輟耕録』に記載されているとしているが、実際には『輟耕録』にこの詩句

はなく、明の張鼎思による『瑯邪代醉編』卷之三十三「鼻飲頭飛」の項目を参考にした可能性が高い⁽²⁾。これがろくろ首の語源を正しく説明している確証はないが、「飛頭蜜」に「ロクロクビ」という和訓を付している以上、漢籍の何らかの記述を参考になっている可能性は大いにある。

ろくろ首は『多識編』にてその名称が登場して以来、仮名草子や浮世草子、赤本において語られ、またその姿が描かれた。版本の隆盛が京や大坂から江戸に移ると化け物を扱った黄表紙にはほぼ必ず描かれる定番のキャラクターとなり、飛頭蜜のような頭が胴体から離れて浮遊する姿から、首が長く伸びる化け物という本邦独自の姿形を持つようになる。絵が中心の出版媒体で滑稽に描かれる一方で、胴体と頭部が分離する、漢籍の飛頭蜜に近いろくろ首は読本や随筆といった文字が中心の出版媒体で、主に語られるようになっていった。同時期に、首が長く伸びるものと胴体と頭部が分離するものという異なる形態を持つろくろ首が出版物に存在し、人々に受容され、語られていたのである。

筆者の研究テーマは、近世初期にその名称が登場して以降、現在まで文学上や絵画上に存在し続け、更には映像や立体造形物にも登場するようになり⁽³⁾、人々の間で高い知名度を保っているろくろ首がどのような発展の過程を経てきたのかを、近世文学、本草学、医学、民俗学など多様な視点から研究検証することにある。本稿はその中でも、ろくろ首の登場する物語の、最古の事例と考えられる延宝五年（一六七七）刊『諸国百物語』について論じる。ろくろ首について論じる上で『諸国百物語』を重要視する理由は、『諸国百物語』が「五巻、各巻二十話の怪談を収める本書は名実ともに斯界の第一作であり、後続の百物語怪談集で百話を収めるものはなかったから百物語の名に値する斯界唯一の作であった」⁽⁴⁾だけでなく、『諸国百物語』の出典のひとつである『曾呂利物語』の原話において「ろくろ首」という言葉が登場していなかったことにもある。つまり、『曾呂利物語』から『諸国百物語』に話が改変されて収録される過程で、「ろくろ首」の名付けが行われたのである。ここに飛頭蜜の和名としての「ロクロクビ」から、物語を伴った怪談としての「ろくろ首」が誕生したのである。ろくろ首の歴史においてこれは重要な転機であったと考える。『曾呂利物語』と『諸国百物語』の該当する話を、近世初期の怪異小説の状況を踏まえて詳細に比較検討することで、「ろくろ首」物語の発生を確認することが本稿の目的である。

二、寛文期における怪異小説

『諸国百物語』について論じる前にまず、近世怪異小説について考える上で重要な、寛文期の三作品を紹介する。

小澤江美子によると寛文期（一六六一—一六七三）は、唱導を目的とする仏教系怪異小説の『因果物語』、世俗系怪異小説の『曾呂利物語』、中国系翻案怪異小説の『伽婢子』が版行された、近世怪異小説史上で注目すべき時期とされる⁽⁵⁾。

『因果物語』は片仮名本と平仮名本があり、編者は異なるがどちらも寛文元年（一六六一）に版行されたとされる。鈴木正三⁽⁶⁾が民衆の教化のために集めた怪異譚や靈異譚を記した筆録本があり、その筆録本を密かに写して異説を交えて刊行したのが平仮名本である。この平仮名本が世に流布した結果、正三その人と彼の行いが誤解される不都合が起こって来た。そこで止むを得ず、義雲、雲歩ら正三の弟子たちが師の筆録本を改めて版行したのが片仮名本である。書籍目録類において仏教の正法を説いた書物である「法語」に『因果物語』が分類されているのは以上の理由による。『片仮名本・因果物語』について高田衛は「収める話については、常に事件の起った時と所、そして人について具体的に誌しており、怪事奇事のなまなましさは直接つたわってくるかの印象を受ける。話題も多岐にわたっており、この説話蒐集者にとって、ハナシを面白く語ることよりも、できるだけ多くの怪事の実例を、証拠正しく集めることに意がそがれていたことがわかる。」⁽⁷⁾と述べている。

世俗系怪異小説に分類される『曾呂利物語』は寛文三年（一六六三）版行とされるが、成立は万治三年（一六六〇）頃とも言われる。編著者は不明とされる。『曾呂利物語』は内題であり、外題簽では「繪入曾呂利快談話」となっているが、古い書籍目録では「曾呂利物語」あるいは「そりり物語」としているため、『曾呂利物語』と呼称されるのが先行研究では多い。「曾呂利」は伝説的な雑談の名人曾呂利新左衛門のことで、彼に作者を仮託した作品となっている。諸国咄形式の最初のものとして、『諸国百物語』だけでなく『宿直草』

などにも影響を与えた。『曾呂利諸国話』などの改題本もあり、諸国物語の一種として広く読まれたことがわかる⁽⁸⁾。同じ寛文期の怪異小説である『因果物語』と比較すると仏教的な要素が少ないため、唱導目的というよりは娯楽目的の印象が強い。『諸国百物語』は収録した話の出典の多くが『曾呂利物語』からのものである。『曾呂利物語』から『諸国百物語』に書き直された話は、更に仏教的な要素が少なくなり、作品が娯楽目的であることがはっきりしてくる。

中国系翻案怪異小説の『伽婢子』は僧侶、仮名草子作家であった浅井了意⁽⁹⁾の手による作品である。刊行は寛文六年（一六六六）である。「了意が『伽婢子』で努めたところはやはり説話のもつ好奇的興味を中心として、これをできるだけ日本文藝の小説様式に近づけて描き出そうとする点にあつた。もちろんそこに考へられた小説様式は、なほ多分に中世の傳統的色彩に富むものであつた」⁽¹⁰⁾と頼原退蔵が述べているように、文芸作品に対するのと同様の態度で書かれた、初めての怪異小説が『伽婢子』である。粉本からの翻訳や翻案の態度が文芸的であるのは、同じく了意の手による『新語園』⁽¹¹⁾と比べればわかる。『新語園』もその出典は漢籍であるが仮名まじり文で訳出されている。『新語園』編述の目的は漢籍の説話を紹介し、それを読学する初学童稚の啓蒙教化にあるため、『伽婢子』のように本邦の小説様式に近付けるような翻案はされていない。『新語園』の出典そのままに近い訳出を見れば『伽婢子』がいかに文芸化の意図をもって翻案されたかがわかる。『因果物語』『曾呂利物語』『伽婢子』のうち、文芸化の程度が最も大きいのが『伽婢子』である。

三、『曾呂利物語』と『諸国百物語』

近世怪異小説のうち、延宝五年（一六七七）刊『諸国百物語』は、五巻から成る仮名草子で、各巻に二十話収められており、題名通り全百話となっている。作者は不明とされるが、序文には信州諏訪の浪人、武田信行が他の若侍三、四人と雨の夜に百物語の会を行った際に、そこで語られた咄を書き記したのが本書であると書かれている。更に序文には

そのとき、ひやくものがたり
 当時すでに百物語と云双紙あれども、わらんべのもてあそび草にして、出所正しからず。今此双紙はその国々の諸人も聞および見及
 たる咄の証拠たゞしきをあつめ五巻として諸国百物語と名附けるとしか云。(12)

とあり、怪談集ではないものの、万治二年（一六五九）刊の笑話集『百物語』を意識した上で、寛文末年に刊行された『一休諸国物語』に始まる、諸国における見聞や、話の舞台を諸国に配する諸国物語系の形式を怪異小説に取り入れたのが『諸国百物語』の特徴であると言える。

『諸国百物語』は序文にて見聞した諸国の話を集めたと述べているが、全百話のうち三十五話はその出典が明らかになっていて⁽¹³⁾、その三十五話のうち、二十五話は『曾呂利物語』に拠っている。話が『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ取り入れられた際の改変には『諸国百物語』の編集意図が察せられる。『諸国百物語』では『曾呂利物語』に比べて、国名や地名、特定の人物名が強調される。例えば『曾呂利物語』巻之一の二「女のまうねんまよひありく事」は『諸国百物語』の巻之二の三「越前の国府中ろくろくびの事」に当たるが、章題からして「越前の国府中」と諸国物語系のように改変している。もう一例挙げると、『曾呂利物語』の巻之三の二「りこんといふわづらひの事」は『諸国百物語』の巻之一の十一「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」に当たる。ここでは特定の人物名が章題に付けられている。また、『曾呂利物語』の方では「ある人のいはくりこんといふわづらひなり」と結ばれており、現象の原因が離魂病であると判断されているが、『諸国百物語』の方では離魂病についての言及はなく「かゝるふしぎも有ることにこそ」という言葉で話が結ばれている。太刀川清はこのような、話の結末を不審のままに残そうとするような改変について「こうした試みは怪談会での即興とも解されるところで、いかにもその場に相応しいものと言わなければならない」と指摘している⁽¹⁴⁾。

国名や地名、特定の人物名を強調したこの改変は序文の「此双紙はその国々の諸人も聞きおよび見及びたる咄の証拠たゞしきをあつ

め」とあるように、話の実証性を主張するためであると考えられる。加えて、序文で百物語の会で語られた話を集めたものであると設定しているのに合わせて、話の語り口を即興性のあるものに改変し、『曾呂利物語』ではある程度真相が明らかになっている話であっても、あえて不明な点を残したまま結話するよう改変することもあった。諸国物語の形式を踏まえることで各話が実話らしくなるよう改変し、さらに百物語という語りの場を紙面で再現するため、即興性の高い語り口にも改変している。集めた話の出版は先行作品に抛りながらも、実証性や即興性を強調する意図が『諸国百物語』には存在していると考えられる。

四、『曾呂利物語』と『諸国百物語』における「ろくろ首」話の比較

前章で述べたように、『諸国百物語』の卷之二の三「越前の国府中ろくろくびの事」は『曾呂利物語』卷之一の二「女のまうねんまよひありく事」を出典としている。ろくろ首が登場する、現在確認できる物語の中で最も古いものが『諸国百物語』卷之二の三「越前の国府中ろくろくびの事」である。しかし、その原話の『曾呂利物語』卷之一の二「女のまうねんまよひありく事」には「ろくろ首」という言葉は登場しない。『曾呂利物語』から『諸国百物語』にこの話を取り入れられた際に「ろくろ首」が書き加えられたと思われる。『曾呂利物語』での「女の妄念」に、『諸国百物語』の編者が意図的に「ろくろ首」と名付けたことが考えられる。章題も「女のまうねんまよひありく事」から「越前の国府中ろくろくびの事」に改変されている。章題に「ろくろくび」のような怪異の名称が来るように改変された例は他に『諸国百物語』卷之二の七「ゑちごの国猫またの事」がある。こちらは『曾呂利物語』卷之五の一「龍田姫の事」が出典となっている。こちらの例も、出典と改変後の話の内容はほぼ同じであるが『曾呂利物語』の方にはない「猫また」という名称が『諸国百物語』の方の章題と文章中に使われている。『曾呂利物語』と『諸国百物語』の間にこのような改変は、怪異現象という題材に対して、単に怪談や奇談として述べるだけでなく、そういった現象に名付けを行おうとした意図が感じられる。

また、本稿末に掲げた『曾呂利物語』と『諸国百物語』の一話を読み比べればわかるが、『諸国百物語』の方は『曾呂利物語』での描写を所々省略している。例えば『曾呂利物語』では、

おとこすこしもさはがす刀をぬきて切てかくれば、そのまくだすちをかへて上のかたよりきたる。つゞいておふほどに

とあるのを『諸国百物語』では

男おとこさわがずわき指さしをぬきて切はらひければ、此くび上かみがたをさしてにぐるをおふてゆく。行ゆくほどに

と改変していて、動作の省略により語り口が洗練されて引き締まっていて、『曾呂利物語』の方の冗長さが改められている。『曾呂利物語』の方で描写していた部分を、『諸国百物語』の方では省略することで、読みやすさは勿論のこと、よりその場での語りに近いものとなっている。

『曾呂利物語』で迷い歩いた女の妄念と説明された「女の首」が、『諸国百物語』において「ろくろ首」という漢籍に由来した名称を獲得した背景には、本邦の説話と漢籍における説話の類似点を見つけ同定する姿勢のあったことが考えられる。例えば、『諸国百物語』巻之四の五「牡丹堂女のしうしんの事」は浅井了意の『伽婢子』にて多く翻案された、明の瞿祐の中国短編小説集『剪灯新话』（一三七八年頃成立）「牡丹燈記」がその出典である。このように『伽婢子』を出典とする話が『諸国百物語』にはいくつかあるため、飛頭蛮等の飛頭伝承についての記述がある漢籍、あるいはそれらを引用した文献も『諸国百物語』を編集した人間の手の届く範囲にあったことは考えられる。

『新語園』卷之三の二十七「落頭民」では晋の帳華撰の『博物志』を引用し「博物志ニ見ユ呉ノ朱桓將軍ノ家ニ一婢アリテ毎夜臥テ後ニ頭乃シ飛去リ天窓ノ中ヨリ出入スト」⁽¹⁵⁾と述べている。ろくろ首に女性が多いという発想は漢籍のこういった記述の影響もあると考えられる。

『曾呂利物語』の「女のまうねんまよひありく事」の展開は、夜道で出遭った女の首が男に追いかけれながらやがて自宅の窓に逃げ込み、元の身体に戻るというものである（首が実際に胴体から離れていたのかどうかはその描写がないのでわからない）。この話と飛頭蜜の、夜中に胴体から首が離れて活動し夜明け前に戻って来るといふ伝承との類似から、飛頭蜜の和名である「ロクロクビ」が用いられたのではなからうか。そう考えると同じく女の首の怪異である『諸国百物語』卷之二の十三「奥州小松の城ばけ物の事」で、城の留守居番の妻が出遭った、笑いながら宙を舞う女の首の怪は、なぜ「ろくろくび」と呼称されなかったのか、その一因が推測できる。「ろくろ首」と名付けたのは、首だけで活動した後、元の胴体に戻るといふ飛頭蜜の伝承との類似からであって、宙を舞う女の首の怪異それ自体を「ろくろ首」と呼ぶわけではなかったと考えられる。

もう一つの注目すべき『曾呂利物語』と『諸国百物語』に収められた両話の違いは、女の首を追い駆けた男が夫婦に自分が体験したことを説明する最後の部分にある。『曾呂利物語』の方では男が、

たゞ今おひ参らせ候は我らにて候。扱は人間にてわたらせ給ひけるか、罪業のほとこそあさましけれ

と、女房の罪業の深さを男が説明する。そして女房は我が身を嘆き、

此有さまにてはおとこにそひさふらふことも心うし

と京へ上り、北野は真西寺に籠って出家してしまうのである。その結末を『曾呂利物語』の筆者は「まことに有難き^{がた}ためしにぞ」と評価している。『曾呂利物語』は同時期に唱導目的で編まれた『因果物語』に比べると世俗的ではあるが、怪談奇談を語る際に仏説に基づくという伝統的な様式からは脱しきれず、発心を促す結末となっている。章題が「女のまうねんまよひありく事」となっていることも合わせて、本話は女人の罪業の深さを強調し、信仰を促す様式に則っている。

一方で、『諸国百物語』の方では男は夫婦に、

ちかごろそこつなる申事にて候へども、われさはや野にてかやうくの事にあひ是^{これ}までおわへ参^{まい}りて候

と始めから終わりまで丁寧に説明する。それに対して夫婦は「さてはさやうにて候や。扱々^{さくさく}罪業^{ざいごふ}のほど御はづかし候」と驚き、女は夫と別れて京に上り、嵯峨の奥に庵室を結んで余生を過ごしたということになっている。『曾呂利物語』の「まことに有難き^{がた}ためしにぞ」の部分「ろくろ首」と云ものもある事にこそと人のいひける也」と話を聞いた人々の感想を述べるに留まっている。夫婦のどちらが「御はづかしく」思ったのかは明確に示されない。また、『曾呂利物語』では尼の入水伝説の残る、女人の信仰と関係の深い北野真西寺⁽¹⁶⁾に女が入ったとしているが、『諸国百物語』では嵯峨の奥に庵室を結んだと語られているだけである。これらのことから、『諸国百物語』の方では女性の罪業の深さに重きを置いているとは考えられない。

この比較から、『曾呂利物語』では話題の中心が、女性の罪業の深さゆえに起こった奇異な現象とそれによる発心と出家であったのに対し、『諸国百物語』では「ろくろ首」という怪異現象それ自体に移っていると考えられる。これは中古文文学における生霊などに代表される、魂の遊離についての仏教的な物語様式から外れたものであると考えることもできる。怪異の名付けは、奇異な現象を因果の報い

と解釈する仏教的な態度を減少させ、本草学的な興味に基づいて怪異を語ろうとする態度のあらわれでもあった。『諸国百物語』後に出版された『古今百物語評判』では、ろくろ首に遭遇するのが高僧であり、高僧伝の様式も持っているが、「ろくろ首」の解説には漢籍を引き、科学的な説明を試みている。『諸国百物語』における『曾呂利物語』からの改変は、比較したろくろ首についての話に限って言えば、仏教的な教訓から怪異それ自体に主眼を置いた物語への転換と位置付けることができる。そしてその転換により、ろくろ首は本草学的な視点から、怪異それ自体を中心として語られるようになっていくのである。

五、「女の首」の挿絵の比較

「近世初期の草子で挿絵を有することは、大きなセールスポイントであった。挿絵を持つ仮名草子や浮世草子の殆どが、題簽に「絵入」と銘記したし、また挿絵に本文読解の手助けとなるヒントや素材の出所を暗示する例を、我々は多く知っている。挿絵は読者の興味をつなぐ強力な手段でもあった。」と江本裕が述べているように⁽¹⁷⁾、仮名草子では挿絵は重要な役割を果たしていた。例えば、先に挙げた『因果物語』の平仮名本が、本来の著者である鈴木正三の弟子らが片仮名本『因果物語』を版行せざるを得なかったほど世に横行したのも、平仮名本が「絵入」を謳っていたことが一因であったと考えられる。『曾呂利物語』も、古い書籍目録には「曾呂利物語」や「そろり物語」とあることが多いが⁽¹⁸⁾、早稲田大学図書館所蔵のものは題簽に「繪入曾呂利快談話」とある。『諸国百物語』は、残念ながら現存本には原題簽がないため「絵入」と冠していたかどうかは不明だが、挿絵があり本文読解の助けとなっている。

『曾呂利物語』巻第一の二「女のまうねんまよひありく事」と『諸国百物語』巻之二の三「越前あちぜんの国府中くにふちうろくろびの事」は両者とも本文に挿絵がある。『曾呂利物語』の方は、男が女の首に遭遇した後、刀をかざして追い駆けている場面を描いたと思われる(図1)。一方の『諸国百物語』の挿絵は女の首と男が遭遇した場面を描いている(図2)。図1の石塔は背景としてしか描かれていないが、図2

の石塔は、その下から女の首につながる筋が描かれているため、「この野に大なる石塔あり。そのしたよりにわ鳥一疋いで、道にふさがりぬけるを、よくく見れば、女のくび也。」という部分を視覚的に説明した形になっている。女の首から石塔の下まで描かれた筋が、女の首の動きを表したもののなか、それとも『古今百物語評判』のようにろくろ首の抜け出た頭部と胴体をつなぐ筋(図3)を描いたものなのかを判断することは難しい。だが、石塔と女の首を画像上で結び付けたことにより、この挿絵が本文理解を助ける役目を果たしていたことがわかる。

『諸国百物語』から百年近く下った安永五年(一七七六)刊の黄表紙『御伽百物語』(作者不明・鳥居清経画⁽¹⁹⁾)には『諸国百物語』を出典とする話と挿絵がいくつかあるが、その中に「越前の国府中ろくろくびの事」も入っている。『御伽百物語』は中本三卷合一冊で十五丁から成っている。三卷の上・中・下のうち、中巻は明和四年(一七六七)刊の読本『新説百物語』を出典とし、上下巻は『諸国百物語』を出典としている。

『御伽百物語』のろくろ首の絵は図2と同じ場面を描いたものであるが、図1や図2に比べて人物を中心に描き、男の姿勢には浄瑠璃や歌舞伎の影響が見て取れる。

同内容の本文に付された挿絵である図1、図2、を比べると、図1は本文の一場面を描いて本文理解を助けるものになっている。図2は一場面を描いただけでなく、図1では背景となっていた石塔と女の首を筋あるいは動線で結びつけることで、本文の説明を補う挿絵の機能がより大きくなっている。黄表紙である『御伽百物語』は、文よりも絵が主立っている。そのため人物を大きく描いている。首が長く伸びるろくろ首は、ろくろ首の視覚的な表現から生じたという指摘もあり⁽²⁰⁾、動線を描き込んだ『諸国百物語』の挿絵がろくろ首の図像上の展開において重要な地位にあることは確かである。

六、まとめ

以上、『曾呂利物語』と『諸国百物語』におけるろくろ首関連の話を比較しながら、ろくろ首がどのように語られていたのかを見た。「ろくろ首」という怪異が先にあるのではなく、迷い出た「女の妄念」として語られた女の首が、漢籍の飛頭蛮などの記述と結び付けられて「ろくろ首」と名付けられたのが『諸国百物語』の「ろくろ首」であると言える。唱導目的の明白な『因果物語』などに比べると通俗的ではあるが、まだ怪異を仏教的な様式で語ることから抜けきれていない『曾呂利物語』から、諸国の怪談奇談での怪異現象自体を語ることに重きを置いた、娯楽目的の強い『諸国百物語』への話の改変は、ろくろ首にとって、漢籍由来の飛頭蛮の和名から本邦を舞台にして語られる怪異の物語のひとつとなる契機となったと考えられる。

最後に、『諸国百物語』以降の、百物語の様式を持つ作品におけるろくろ首を見てみる。

『古今百物語評判』『絶岸和尚肥後にて轆轤首見給ひし事』で絶岸和尚が遭遇した轆轤首の女房は、抜け出た頭部と胴体が白い筋のようなものでつながれていた。これは飛頭蛮などの漢籍における飛頭伝承にはない特徴で、本邦で付け加えられたと考えられる。冒頭で既に述べたが『古今百物語評判』は漢籍を引用して轆轤首の名称の由来を説明し、そのような怪異が中央から離れた辺境の地には有り得ると説き、当時としての科学的な説明を試みている。

『諸国百物語』以降の「百物語」と題名に付く作品は娯楽性が強くなっていったが、そういった娯楽性の強い「百物語」作品の流行に対して、『伽婢子』の特徴である教訓的叙述の態度も取り入れ、娯楽性と教訓的な態度の両方を持つ⁽²⁾、享保十七年（一七三二）刊の浮世草子『太平百物語』巻之四の三十六「百々茂左衛門ろくろ首に逢ひし事」では、百々茂左衛門という侍が夜更けに知人の作之丞の屋敷の高塀の傍で女の首に遭遇する。この女の首は作之丞の腰元で、後日、百々茂左衛門から話を聞いた作之丞がそのことを腰元に伝えると、腰元は暇乞いをして尼となる。『諸国百物語』の話に似ているが、こちらでは女房ではなく腰元である。怪異を唱導目的の様式で語ることから脱却した、娯楽目的の『諸国百物語』では女房の出家にそれほど重きが置かれていなかったが、『太平百物語』では教訓的な配慮からか結末は

此女いと恥かしき事におもひ、直に主人に御いとまをこひ、髻おし切り尼となり、前生のかいぎやう拙き事を歎きて一生仏に伝へ、身罷りけるとぞ。⁽²²⁾

となっていて、百物語と題に付す作品の娯楽的要素が強くなっていた当時の状況に対して、教訓的な要素を保持しようという意識が見える。

『曾呂利物語』の原話が『諸国百物語』に収録されるにあたって改変され、「ろくろ首」という呼称が採用されたことで、単に「飛頭蛮」であったものが、物語を伴った本邦における怪異現象へと発展することになった。こうして、ろくろ首は本邦の近世怪異小説にその居場所を得たのである。

注

- (1) 中田祝夫・小林祥次郎『多識編自筆稿本刊本三種研究並びに総合索引』（勉誠社 一九七七）影印篇
- (2) 寺敬子『百物語評判』と『新語園』——『百物語評判』の引書に関する調査から——（『日本文藝研究』五七号 関西学院大学 二〇〇五、十二月）及び『和刻本漢籍隨筆集 第七集』（古典研究會 一九七三）。『瑯邪代醉編』の和刻本は延宝三年（一六七五）であるため、儒医である山岡元隣が生前にこれを読んでいたことは十分考えられる。また、『古今百物語評判』の轆轤首の話で引用している『博物志』『搜神記』の話は『古今百物語評判』に先行する、天和二年（一六八二）刊の浅井了意編『新語園』卷之三の二十七「落頭民」にも引用されており、『古今百物語評判』は『新語園』の記述も参考にした可能性もある。『古今百物語評判』で述べている資

料から直接引用したというよりは『新語園』のような二次資料、三次資料を引用した可能性がある。

(3) 横山泰子「近世文化における轆轤首の形状について」(小松和彦編『日本妖怪学大全』小学館 二〇〇三)

(4) 太刀川清校訂『百物語怪談集成』(国書刊行会 一九八七) 三六〇頁

(5) 小澤江美子「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ——」(『大妻大學大學院文學研究科論集』二号 大妻女子大学 一九九二、三月)

(6) 鈴木正三 一五七九—一六五五。江戸時代前期の独創的な仏教思想家。もとは武士であったが世を厭って出家し、諸方を旅したのち、故郷である三河国加茂郡の石平に恩真寺を開創した。教団に関しては曹洞宗に属するとされるが、宗派的関係ははっきりしない。従来の仏教の隠遁的な傾向に反対し、あらゆる職業が仏のはたらきを具現しているものであると主張した。仏教学に関しては無学であると自称し、民衆のためにもっぱら仮名書きの和文でのみ著作を行った。(『日本近世人名辞典』吉川弘文館 二〇〇五 中村元執筆「鈴木正三」の項より)

(7) 高田衛編・校注『江戸怪談集(中)』(岩波文庫 一九八九) 四〇六—四〇七頁

(8) 注7に同じ。四〇五頁。

(9) 浅井了意?—一六九一。江戸時代前期の僧侶。仮名草子作家。瓢水子・松雲・昭儀坊などの別称があり、了意はその号である。本願寺教団の寺侍の出身で、後半生は京都二条本性寺(真宗大谷派)の住職であった。執筆は各分野にわたって多くなされたが、仏書の解説書が非常に多い。著作に一貫しているのは教訓的、啓蒙的な姿勢であるが、そこに笑いと哀感を加えているため、非常に人間的なものが滲み出ている。後世に与えた影響は怪異小説の分野が最も大きいといわれる。(『日本近世人名辞典』吉川弘文館 二〇〇五 松田修執筆「浅井了意」の項より)

(10) 頼原退蔵「近世怪異小説の一流流」二八頁(頼原退蔵『江戸文藝研究』角川書店 一九五八)

(11) 浅井了意編『新語園』天和二年(一六八二)刊。十卷十冊。延宝九年(一六八二)自序。一条兼良が初学童稚のために異国中国の故事を和訳して編述し、『語園』(寛永四年刊)としたことに倣い、それと同様な方法で漢籍の中から中国故事説話の要所を摘出し

て、出典を記した上に、読学の者のためにと仮名まじり文に訳出している。その目的は読学する者の啓蒙教化を資けるところにあると見られる。(吉田幸一『新語園』解説『新語園』古典文庫 一九八一)

(12) 太刀川清『近世怪異小説研究』(笠間書院 一九七九) 二二七頁

(13) 注5に同じ。

(14) 注12に同じ。五五頁。

(15) 注11に同じ。一九八一—一九九頁。

(16) 三好修一郎「越前さはや轆轤首説話考」(『仁愛国文』一九号 仁愛女子短期大学国文学会 二〇〇二)

(17) 江本裕『近世前期小説の研究』(若草書房 二〇〇〇) 一五九頁

(18) 注7に同じ。四〇五頁。

(19) 『御伽百物語』は序跋が無く、作者画工の署名も無いが『黄表紙総覧 前編』(棚橋正博 青裳堂書店 一九八六)に従うと、画者は鳥居清経とされる。出版は江戸書肆伊勢屋幸七である。参考にしたのは近藤瑞木「黄表紙怪談集の諸相——『御伽百物語』、『勇士怪談話』、『怪談奇発情』」(『國文學 解釈と教材の研究』五二号 二〇〇七)

(20) 注3に同じ。

(21) 注4に同じ。三五八頁。

(22) 注4に同じ。三三四—三三五頁。

○本文中に引用した『曾呂利物語』と『諸国百物語』のテキストは以下のものである。

・『曾呂利物語』 早稲田大学図書館蔵。大坂心斎橋通安堂寺町田中宋榮堂秋田屋太右衛門出版。江戸末期の後刷本であると考えられる。
内題『曾呂里物語』(外題『繪入曾呂利快談話』)

卷第一 二「女のまうねんまよひありく事」

越前の北庄えちぜん きたのしやう

といふ所に、あるものかみがたへまた夜をこめてのぼるとて、さわやといふ所に大なる石たう有ける。その下よりにはとりひとつたちて道におるく。月夜かげによく／＼みれは女のくびなり。彼おとこをみてけしからすわらふ。おとこすこしもさはがす刀をぬきて切てかくれは、そのまくだすぢをかへて上のかたよりきたる。つゞいておふほどに府中の町かみひぢといふ所までおひつてみれば、ある家のまどよりうちへとび入。ふしぎなることに思ひしばし立やすらひて内のやうを聞は、女ばうの聲にて男をおこしあらおそろしや只今の夢に、さわや野をとをりしがおとこ一人我をきらんとておふ程に是まてにげれると思へは夢さめぬ。あせ水になりしなどいひて大いきついてかたる。門にあるおとこ此由を聞戸をたくき、りやうじなる申ことにて候へ共申へき事ありあけさせ給へとて内に入、たゞ今おひ参らせ候は我らにて候。扱は人間にてわたらせ給ひけるか、罪業ざいごうのほとこそあさましけれとてとをり侍る。女も身の程をなげき、此有さまにてはおとこにそひさふらふことも心うしとて京へのぼり、北野真西寺きたのしんせいじに取こもり、ひとへにごせを祈りける。まことに有難がたきためしにぞ」

・『諸国百物語』 太刀川清『近世怪異小説研究』（笠間書院 一九七九）にて翻刻されたテキストを使用した。

元のテキストは東京国立博物館蔵。京寺町通松原上ル町菊屋七郎兵衛開板とある。

『諸国百物語』 卷之二 三「越前の国府中ろくろくびの事」

えちぜんのくに喜多の郡きた こおりのもの、上がったへのぼるといそぐ事ありて夜をこめてゆくに、さはやと云野のを過すぎけるが、この野のに大な

石塔あり。そのしたよりにわ鳥一疋いで、道にふさがりぬけるを、よく見れば、女のくび也。此くび男をみてにこくとわら
 ふ。男さわがずわき指をぬきて切はらひければ、此くび上がたをさしてにぐるをおふてゆく。行ほどに府中の町上市と云所のある家
 の窓のうちに入ぬ。男ふしぎにおもひ、門にしばらく立やすらひ、内のやうすをうかひ聞ければ、女ばうのこゑにて、あらおそろ
 しや。たゞ今ゆめにさはや野をとをりければ、男われをきらんとておひけるほどに、やうく是までにげかへりぬと、夫をおこし
 て物がたりしけるを、門なる男これをきゝて、戸をたゝきうちに入、ちかごろそこつなる申事にて候へども、われさはや野にてかや
 うくの事にあひ是までおわへ参りて候と、はじめをわりねんごろにかたりければ、さてはさやうにて候や。扱々罪業のほど御はづ
 かしく候とて、夫婦おどろき、その、ちかの女は夫にいとまをこひ京にのぼり髪をおろし、嵯峨のをくに庵室をむすびばだいをね
 がいて往生しけると也。ろくろ首と云ものもある事にこそと人のいひける也。

○図版

図1 『曾呂利物語』（東北大学附属図書館狩野文庫蔵）



図2 『諸国百物語』（注4に同じ）

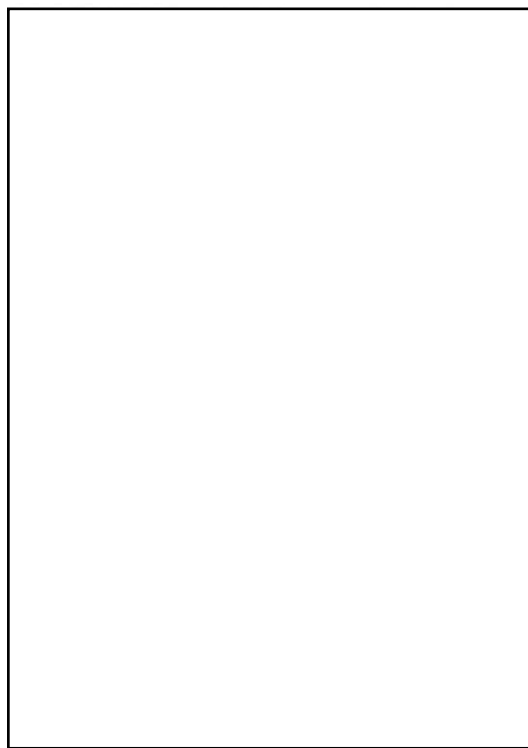




図3 『古今百物語評判』（太刀川清校訂『続百物語怪談集成』国書刊行会 一九九三）